

学位論文審査の要旨

学位申請者	西岡 さくら 人間発達科学専攻2018年度生		論文題目	ボツワナにおける就学前教育・保育 (ECCE) 普及要因の検討 —社会構造によるECCEの供給への影響を中心に—
審査委員	主 査:	浜野 隆 教授	インターネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 可
	副 査:	浜口 順子 教授		「否」の場合の理由
	副 査:	富士原 紀絵 准教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	池田 全之 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	大多和 直樹 准教授		<input type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (社会科学)			<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Sustainable Development)			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文の インターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本研究は、アフリカのボツワナを対象に、就学前教育・保育 (ECCE) の普及要因・普及阻害要因の検討を行ったものである。1990年代以降、国際的な教育開発において基礎教育を重視する傾向が強まってきている。初等教育がおおむね普及した現在、国際教育開発の関心は、初等教育の前段階である就学前教育・保育に移りつつある。また、就学前教育・保育は、SDGs (持続可能な開発目標) における多くの目標との関連が強く、他分野への波及効果も期待されている。教育経済学の分野においても、ECCEへの投資効果が高いこと、社会的格差の是正効果が期待できること、などが指摘されている。

一般的に、経済成長が進めばECCEへの公的補助や家計負担能力も上がるため、ECCEが拡大すると考えられがちである。しかし、本研究はその傾向から大きく外れる国があると指摘する。その一つが、本研究の対象国のボツワナである。ボツワナは、経済開発の指標は高いにもかかわらず、アフリカの中でもECCE普及率が極端に低くなっている。本研究は、ボツワナにおいてECCEの普及が進まない要因を検討し、ボツワナ社会とECCEの関係を説明することを目的としている。

社会的現象を生み出す根本的な構造を明らかにし、社会を説明するという立場をとる。そして、その立場に立つ、マーガレット・アーチャーによる教育量的拡大の説明理論の検討を行っている。そして、ボツワナのECCEが教育量的拡大の段階としては「離陸期」にあること、離陸期においては「供給」が重要な役割を果たすことから、「供給」面に焦点を当てている。

ボツワナは独立時は最貧国であったものの、ダイヤモンドの発見により大きな経済成長を果たした。ただ、その一方で、ダイヤモンドに依存する経済とダイヤモンド産業への中央政府の統制が進んだ。ボツワナの教育開発は、初等中等教育の就学率は他のアフリカ諸国と比べても高くなっており、国際援助機関の関与も1990年代以降は限定的である。ECCEに関しては、中央政府はECCEの基準提示が主な役割であり、直接的な供給はしない立場をとっている。幼い子どものケアと教育のニーズは都市部を中心に高まってはいるものの、保育料が高額な私立の施設が多いため、限られた社会階層しか利用できない。

ボツワナとは対照的に、経済水準は低いにもかかわらず高いECCE普及を達成しているのがマラウイである。マラウイのECCEがなぜ普及しており、ボツワナが低調なのか。経済水準、基礎インフラ、人口要因、ジェンダー、文化・慣習、国際社会とのつながりなどでは十分に説明することができない。そこで本研究が注目しているのは、政策の違いである。ボツワナとマラウイとでは、セクターアプローチ (マラウイのほうが多セクター)、「主な供給主体」 (マラウイのほうが多セクター)、「開発パートナーの支援」 (マラウイのほうが多セクター) の3つの点で違いがある。アフリカ諸国のECCE普及アプローチとしては、政府主導とは一線を画す「コミュニティ・ベースモデル」がある。しかし、ボツワナでは、コミュニティ・ベースのアプローチも普及しなかった。その点について、本研究では、仮説的にはあるものの、ダイヤモンド依存の経済とパトロン・システム (権力者とその庇護を受ける者との互惠システム) を提示している。

第1回の審査会 (2020年11月25日) では、ECCE の普及に社会に根づく構造的な要因が影響することを示したことが本研究の意義として高く評価された。一方、ECCE の概念、用語の定義、構造の実在性、ボツワナにおけるECCEの重要性の認識、ECCEの質などについては加筆・修正要求が出された。その修正を経て、第2回審査会 (2021年1月25日) では、さらに、本研究のオリジナリティと価値 (教育開発論、幼児教育研究、教育社会学における教育拡大論における位置づけ)、推論における主観の働きについて加筆・修正要求が出された。その修正を経て、第3回の審査会 (2021年2月16日) では加筆・修正が適切になされたことを確認し、2021年2月19日に公開審査会を行った。公開審査会では、発表・質疑応答とも的確になされた。

以上より、本論文は、博士 (社会科学)、Ph. D. in Sustainable Development にふさわしいと判断し、合格とした。